

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350348

研究課題名(和文) 異文化「体験」を活かす学習環境デザインの開発 原初的コミュニケーションの観点から

研究課題名(英文) A learning environmental design to utilize intercultural experience

研究代表者

久保田 真弓 (Kubota, Mayumi)

関西大学・総合情報学部・教授

研究者番号：20268329

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、異文化接触時における大学生の「体験」を認知だけでなく情動と態度に着目し異文化「体験」を活かすための学習環境デザインを開発する。発展途上国へのスタディツアーに参加した大学生を研究対象に、参与観察、インタビュー、PAC (Personal Attitude Construct, 個人別態度構造)分析、気分ワークシートを実施した。その結果、参加者の異文化「体験」を活かすには、活動ではなく各個人ごとに違う出来事に着目し、人々とのかかわりの場の確保、自由意志で人と関われる自由時間の確保、ICTの活用、10日間ほどの集団生活が重要であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop a learning environmental design to utilize intercultural experience by focusing on affect and attitude as well as cognition. The subjects are the students who participated the study program in a developing country. Participant's observation, interview, PAC (Personal Attitude Construct) analysis, feeling chart were conducted to gather a data. The results reveals the importance of creating occasions to meet people and to interact freely, using ICT actively, and spending about ten days together as a group.

研究分野：異文化コミュニケーション

キーワード：コミュニケーション 体験 異文化 スタディツアー

1. 研究開始当初の背景

(1) 学生の状況

筆者は、ゼミ生である大学3年生をバンゲラデシュやフィリピンに連れていくスタディツアーを実践しており、それを「経験」と「コミュニケーション」の観点からまとめた(久保田, 2012)。そのような過程で気づいたのは、「貧困」を見に「途上国」へ行くという発想、「ごみ山」を見て貧困を確認するという態度である。また、スタディツアー終了後、反省(内省)の一環で報告書作成、報告会開催を実施し、経験を振り返らせる機会を多々設けるが、Drop Box でファイルを共有するなどテクノロジーを駆使し要領良く分担、分業し、効率よく作業として済ませる傾向が顕著であった。つまりできあがった報告書の見栄えは良いが、表現に深みがなく考察も浅いという学生の状況があった。

(2) ジョン・デューイによる「体験」を含む「経験」

デューイは「経験」を重視し、「継続的な経験」とその際に生じる他者や環境との「相互作用」また環境への働きかけによる「状況の変容」に着目し、経験を振り返る「反省的思考」を育成することで学習を捉えている。その際、「反省的思考」が始まる前に「前反省的状况」があり、ある状況において直観的に不均衡な質の乱れを感じとることで疑問がわく段階があるといわれている(早川, 1994)。本研究では、このようなまだ言語化できず、意味解釈としても定着していないが五感を通して直感する段階を「体験」として扱う。一方「経験」は「私のボランティア経験」のように常に目的があり、それを達成することで「私の経験」として所有できるようになるもの、つまり「自己のなかに意味として取り込んで自己を豊かにしていくもの」(市村・早川・松浦・広石, 2003)として捉える。これまでの異文化「体験」を活かした大学生の育成には、言語活用を含むコミュニケーション能力の向上等があり「経験」を認知的に捉えることに終始していた。そこで、本研究では「体験」にも着眼して意識化することをねらいとする。

(3) 原初的コミュニケーションに着目

原初的コミュニケーションとは「主として対面する二者の間において、その心理的距離が近い時に、一方または双方が気持ちや感情のつながりや共有を目指しつつ関係を取り結ぼうとする様々な営み。」(鯨岡、1997、pp.163)のことである。主に言語使用前の乳幼児と養護者とのコミュニケーションなど限られた分野で研究されているのみで、大学生の異文化「体験」の分析には使用されていない。しかし、海外でも他者とかわる社会的状況を設定すれば原初的コミュニケーションは生起すると考えられる。またその際にパー

スの記号論を援用し、コミュニケーションをシンボル活動として捉えるだけでなく、例えば、怒りの感情に伴い生成された顔の表情(兆候、シンプトム)やそれを模倣しさらに誇張して作った怒りの顔(センブランズ:Liska, 1994)の提示などのようにコミュニケーションをシンプトム、センブランズ、シンボルの3つの記号操作として捉え直す主張を再考する。

(4) 異文化「体験」を活かすための学習環境デザインの開発

本研究では、異文化でのボランティア経験や実習などによる学び(経験)の蓄積だけではなく、個々の無意識の「体験」を掘り起こし、それに気づき、振り返り、自分のものとしていく過程を重視し、言語コミュニケーションに終始する大学生の感性を豊かにする(または豊かな感性に気づく)学習環境を構築することを目指す。したがってそれに伴う研究手法も検討する

2. 研究の目的

本研究では、異文化接触時における大学生の「体験」を認知だけでなく情動と行動に着目し異文化「体験」を活かすための学習環境デザインを開発することである。また、その理論的背景としては、「原初的コミュニケーション」の観点から「体験」を捉える重要性を指摘し、記号論を土台としたコミュニケーション理論の構築を目指す。

3. 研究の方法

本研究では、調査協力者の異文化「体験」を把握するために参与観察、インタビュー、質問紙調査、PAC(Personal Attitude Construct, 個人別態度構造)分析(内藤, 1997)、気分ワークシート(後述)を実施した。

さらに、アクションリサーチ(久保田, 2011)の手法に則り、毎年データ分析結果を吟味し、研究手法を少しずつ改善しながら異文化接触時における「体験」を活かす学習環境デザインの開発に向けた要件の整理をした。

調査協力者は、筆者が毎年実施するフィリピンへのスタディツアーに参加するゼミ生である。調査対象の人数は、平成26年9月16名、平成27年2月11名、平成27年9月13名、平成28年2月11名、平成28年9月16名である。

4. 研究成果

(1) アクションリサーチの経緯と研究手法

研究1年目は、教師が、ゼミ生一人一人に対してPAC分析(内藤, 1997)を実施し、本人も明確に意識していなかった事柄から異文化「体験」を見直すことを試みた。これは、各個人にとっては、教師と対峙することにより、

の重要性を提唱している。具体的にはボランティア活動のように見返りを期待しない純粹贈与の形態の有用性について論じている。スタディツアーで出会った人々との継続的な関わりは限られるが、そこでの体験をもとに将来的にフィリピンやフィリピン人に関心を持つことは期待できるだろう。

また、協力者 A のような感情は、他者または環境との相互作用の結果、自覚されたといえよう。現象学では「生活世界」(竹田, 1989, p.144) の理解をつねに「私」からはじめ、そして「他我」の認知があり、それが客観世界の実在という妥当の前提となる。そして、「他我」の認知について、つまり、「他なるもの」の了解の第一起点(原的なもの)について、フッサールは「<知覚>直観」(p.136)としているが、竹田は、「<知覚>直観であるより、情動的所与」(p.137)ではないかと提言する。つまり、ある感覚が「痛い」といった「<知覚>として受けとめられるためには、その情動の所与が必要であり、その逆ではない」(p.137)という。したがって、A の感情は、たとえ「英語の聞き取りが難しい」状態であってもフィリピン人とさまざまな場面で積極的に関わることによって揺り動かされ、その感情を通して初めて行ったフィリピンでの経験を捉えたといえよう。

したがってスタディツアーでは、人々のかわりを促進できる自由な時間や SNS を利用できる交流をどのように確保し活かすかも意識する必要があることが示唆された。

(3) 集団による「体験」

フィリピンのスタディツアーでは、毎年協定校である大学を 2 校、そのほか NGO、高校等を訪問し、授業実践等の活動をしている。例えば、平成 28 年 9 月に実施したスタディツアーでは、フィリピン工科大学で、ホセ・リサルについて調査したり、事前に用意した広告を協働で分析したりした。

そこでこのようなスタディツアーを成功裏に実施するには、渡航前の事前準備に時間をかける必要がある。学生はゼミの授業以外に自主的にサブゼミを毎週おこない準備した。また、渡航中も毎晩会議をし、反省会と次の日の確認をした。種々多様な活動に関しては、学生全員で役割分担はするが、常に全員がすべての授業や活動に何らかの形でかかわることが求められている。

このような協同作業では、個人の働きも重要ではあるが、集団での作業も重要になってくる。

そこで、スタディツアー実施後、気分ワークシートを用意し、気分の高低変化と活動または個人の出来事がどのように関連しているのかを見た。図 2 はその結果である。縦軸は気持ちの度合い、横軸は日程を表している。

これによると後半の 6 日目に学生 14 名(2 名は病欠)の気持ちの高低差が 2 となり、まとまっていることがわかる。それは授業の行動観察をしていても認められた。例えば、互いに目を合わせて合図する、互いの動作が補完的になっているなどである。そして夜の反省会のときは、相手の目を見るようになり発言者と次の発言者の間が短くなる、他者の意見から引き出された意見がでてくる、などである。



図 2 気分の高低変化

このような行動に変化があらわれる要因としては、集団生活とある程度の長い時間を共に過ごしたこと、また、授業の目標を頭で理解するのではなく各自が自分のものにしたことが考えられるだろう。フォーマルやインフォーマルに何度も話し合うことでお互いのことがわかり、「リズム」が生まれてくるようだった。

野村(2010)が紹介しているマクタガートの時間論(McTaggart 1927, 入不二 2002)には、E 系列の時間というものがある。これは、対話的時間とも訳され、時計や時制で区切られる時間ではなく、他者との関係で成り立つ時間のことである。つまり「時制がなく、一定の方向を持たない時間であり、生きていることを示すリズムと変化があるだけ」(p.107)のものである。コミュニケーションには、同調作用というものがあるが、それは、マクタガートの E 系列の時間ともいえるかもしれない。そして本実践で重要なのは、この「リズム」が現出してくるような集団生活や協同作業の意義を見直すことではないだろうかと考える。

(4) まとめ

一般に発展途上国へのスタディツアーにおいては、事前に準備した活動を中心に振り返り、参加者の学びにつながったか否かを評価することが多い。しかし、本研究では、それと並行して生起していると考えられる個々の異文化「体験」に着目した。その結果、参加者の異文化「体験」を活かすには、活動ではなく各個人ごとに違う出来事に着目し、人々

とのかかわりの場の確保、自由意志で人と関われる自由時間の確保、ICTの活用、10日間ほどの集団生活が重要であることが示唆された。

ところで、前述した Liska (1994) は、動物のコミュニケーションをもとにコミュニケーションを媒介するサイン(記号)には、シンボル(表象)、センプランス、シンプトム(徴候)が連続体としてあると述べている。そして、センプランスとは、徴候を誇張したもの、例えば、怒りの感情に伴い生成された顔の表情(兆候)を模倣し、それを誇張して作った怒りの顔などをさす。また、写真や地図など事物を類推することができるものも含まれる。本研究の異文化「体験」を活かすとは、シンボル活動すなわち言語コミュニケーションを重視するだけでなく、センプランス、すなわち模倣力や類推する力も育成することではないかと考える。しかし、この点のさらなる実証研究は今後の課題としたい。

<引用文献>

- 市村尚久・早川操・松浦良充・広石英記『経験の意味世界をひらく』東信堂 2003
- 入不二基義、『時間は実在するか』講談社現代新書 2002
- 内藤哲雄『PAC分析実施法入門[改訂版]』ナカニシヤ出版、1997
- 鯨岡峻『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ書房、1997
- 久保田真弓「『経験』と『コミュニケーション』の関係」久保田賢一・岸磨貴子編著『大』学教育をデザインする』晃洋書房、2012、115-133
- 久保田真弓「アクションリサーチ」末田清子、田崎勝也、猿橋順子、抱井尚子編著『コミュニケーション研究法』ナカニシヤ出版、2011、214-225
- 竹田青嗣『現象学入門』NHKブックス 日本放送出版協会、1989
- 中村敏枝・長岡千賀「相互コミュニケーションにおける同調傾向」大坊郁夫・永瀬治郎編『関係とコミュニケーション』ひつじ書房、2009、80-99
- 野村直樹『ナラティブ・時間・コミュニケーション』遠見書房、2010
- 早川操『デューイの探究教育哲学』講談社、1994
- 矢野智司「『経験』と『体験』の教育人間学的考察 純粹贈与としてのボランティア活動」市村尚久・早川操・松浦良充・広石英記編『経験の意味世界をひらく』東信堂、2003、33-53
- Kubota, M. Intercultural communications related phenomena on Facebook、情報研究、関西大学総合情報学部、第44号、2016、

43-53

Liska, J. The Foundation of Symbolic Communication, Quiatt, D. & Itani, J. (eds) Hominid Culture in Primate Perspective 1994、233-251

McTaggart, J.E., The nature of existence. Vol. , Cambridge University Press、1927

5. 主な発表論文等

[学会発表](計4件)

久保田真弓、言語・非言語コミュニケーション再考 恣意性に基づく記号から、異文化間教育学会、2017年6月17日、東北大学(宮城県)

久保田真弓、フィリピンにおけるスタディツアーでの学び コミュニケーションのデジタルとアナログの側面に着目して、日本教育メディア学会、2016年11月26日、奈良教育大学(奈良県)

久保田真弓・加地匠、国際交流学習における文化との捉え方再考、日本教育工学会、2015年9月23日、電気通信大学(東京都)

久保田真弓、PAC分析で抽出した海外視察体験の諸相、異文化間教育学会、2014年6月7日、同志社大学(京都府)

6. 研究組織

(1)研究代表者

久保田 真弓(KUBOTA, Mayumi)

関西大学・総合情報学部・教授

研究者番号: 20268329